

葬送の儀次第

通夜

通夜勤行・・・なごりを惜しんで夜を通して故人とともに過ごすあたり、まず仏前に感謝のお勤めをする勤行。

『仏説阿彌陀經』または『正信念仏偈』

『御文章』 拝読または法話

葬儀

帰敬式

・・・おかみそりともいい、故人が存命中に帰敬式を受けていない場合は、導師が本願寺のご門主さまに代わって帰敬式を行い、法名が授与される。仏教徒としての葬儀を行うという意義をあらわすものです。

ご会葬の皆様へ 浄土真宗本願寺派(お西)



葬儀よろず心得

浄土真宗本願派

高岡教区基幹運動推進委員会編

焼香に出る際の作法

焼香に出るとき、戻るとき、導師に軽く一礼してください。

焼香台の二、三步手前で軽く一礼する。



合掌し、お念仏をととなえ、礼拝する。



焼香台の前に立つたら(まだ合掌せず)

一度だけ香をくへる。



二、三步後退して軽く一礼する。



(1) 出棺勤行

・・・本来自宅で行われる勤行で、自宅からお棺を送り出すにあたり、我が家の本尊阿彌陀如来に暇乞(いとまご)いの勤行をするという意味で行われる。

『帰三宝偈』の誦読

(2) 葬場勤行・・・本来山野の火葬場で行われていたものを葬儀会場を別にしつらえて行なう勤行。

路念仏(四遍返し)

自宅から火葬場まで、お棺を背負って進む野辺送りの行列の道中に称える念仏になぞらえる。永く引いた音節の「南無阿彌陀仏」四遍を二度繰り返す。

導師焼香

『正信念仏偈』誦読

火葬中の勤行になぞらえる。『正信念仏偈』は如来の大悲と師主知識の恩徳を讃えられた親鸞聖人作の讃歌。

遺族・会葬者焼香

浄土真宗の葬儀の特徴

①(野辺の送りの古風を今に伝える

浄土真宗の葬儀は、古い時代の葬儀の原型である野葬式(野辺の送り)のすがたを伝えていきます。有名な蓮如上人の『白骨の御文章』にそって、その内容を大まかにたどれば次のとおりです。

「野外やがいに送りて」

出棺しゅつかんの勤行と路念仏じねんぶつ

「夜半よちの煙けぶりとなしはてぬれば」

火葬中の勤行

(葬場勤行と焼香)

「ただ白骨はくこつのみぞ残り」

還骨かんこつの勤行

②(浄土の光は今を生きる私の上に

浄土真宗の葬儀の内容は、実に簡素な野辺の送りであるということがわかります。

これは、死に方や葬儀の仕方を問わず、阿弥陀如来の名のりであり呼び声である南無阿弥陀仏を自分へのものと受けとめて喜ぶ心の起るとき、すでに極楽浄土は定まるという平生業成の教義に基づくものにはかなりません。

③(愛別離苦を越えて

葬儀は悲しみの別れというのがいつわりのない人情でありましょう。そのままを受け入れ、浄土での再会の約束の儀式と転じてくださるのは阿弥陀如来の大慈悲です。遺族にとって、あらためて如来の光のもとに生き、呼び声のもとに死んでいくことのできる幸せを確かめる場であることが浄土真宗葬儀の基本精神です。

信仰の表現として、葬儀の形は定められているのですから、遺族にとっては先人たちの信仰にしたがい、学び、受け継ぐという意味があるのです。被葬者である故人が無信心であったとしても、遺族が安心してまかせうる阿弥陀如来のましますことを頼もしく仰ぐところに基本があります。

④(本尊中心

ただ死者のみではなく、死者も生者もお引き受けくださる阿弥陀如来を中心とした儀式であることは何より大切な点です。

⑤(簡素を尊ぶ

葬儀だけは貧富貴賤も問題にならない同等な営み方をして、如来の前の平等の表現としてきたのが浄土真宗の伝統です。それ故にこそ、簡素さが尊ばれるのです。

通夜を営む意味

通夜は故人とのなごりを惜しむためのものであるということはもちろんですが、別れの悲しみを通して、いのちの重さを思い、如来の悲願を仰ぐところに大切な点があります。そこに「通夜勤行」の意味もあるのです。

出棺に際して

葬儀に先立って行われる儀式として、いよいよ、ご遺体を住み慣れた家から運び出して葬場へ向かう際のお別れの勤行を意味する。「出棺勤行」があります。無常の世と知りながら執着せずにいられない心を転じて、仏法僧の三宝に帰依し浄土往生を願うべきことを述べた『帰三宝偈』を誦します。

また、帰敬式(おかみそり)を受けていない方の場合、出棺勤行の前に導師の僧侶によって、帰敬式が行われ法名が与えられます。

元来、帰敬式は仏法僧の三宝に帰依して仏教徒になる最も重要な儀式で、生前にご門主さまから受けるのが基本です。生前にその機会がなかった場合に導師の僧侶が代行するのです。仏教徒として送り出すという趣旨です。

弔辞・弔電は誰に対して？

故人ではなく、喪主・遺族に対して、弔い(とむらい)を述べるのが弔電・弔辞です。

弔いとお悔やみの語義に立ち返って考えればよくわかるはず。

弔電の発信者の名前を長々と読み上げる例をよく目にしますが、会葬者が欠席者の名前を拝聴するというのは矛盾したことでないでしょうか。特に政治家の名前が読み上げられるとき、葬儀の政治利用という不敬にあたる懸念があります。

葬儀をどう受け止める

浄土真宗の葬儀は、出棺勤行と葬場勤行をかたどったもので、いわゆる故人に別れを告げる告別式ではありません。弔電や弔辞も故人へのものではなく、遺族への弔い(とむらい)とねぎらいの形をとるのが本当です。死という現実を直視しようという仏教の基本精神に立っているからです。

また、死者を浄土へ送る呪術でもありません。人間には自分で浄土へ往く力も、ましてや人を浄土へ送る力もないからです。

喪主にとっては、自らの家族である故人を葬る儀式であると同時に、故人の有縁の恩人への謝意表明の儀式でもありましょう。会葬者たちにとっては、故人の生涯を偲ぶとともに、その生を心に刻み、自らを省みて、故人のいのちに応える道を尋ねる儀式でありましょう。